伊尾木森林鉄道物語
別役～美舞ダム

伊尾木森林鉄道は魚梁瀬・馬路と同時に奥地国有林開発のためもうけられた局管内で最も古い森林鉄道であった。
その沿革は明治43・44年旧東川村古井～大井間5,906間(1間1.818ｍ)に軌条が敷設され材木は大井から流送され伊尾木で陸揚げされていた。
また、一部は杉の瀬にあった製材所で製材されていた。
明治45年杉の瀬から伊尾木海岸まで調査測量着手。
大正3～4年の2年で工事が完成され延長995間の軌条敷設が完成した。
大正5年古井～横荒間2,957間が施工され、伊尾木森林鉄道の幹線が完成し、伐採の進展にともない支線網ができあがっていった。

完成当時は列車編成ではなくトロリー一台に一人がつき、山元から伊尾木貯木場まで手押しで乗り下げ、上りは牛やエス犬二・三匹に曳かせていた。
当時、横荒官行事業所から貯木場までの33kmをトロ押し夫は70名ほどいて、早晩の組は夜の11時に伊尾木を出て夜どおしで事業所に着き、翌朝材木を積んで夕方、伊尾木へ帰り、次の組は途中、大井か古井で一泊し、二日がかりで往復していた。

このやり方は大正8年ガソリン機関車が導入されるまで続き、路体改良や整備が行なわれ、橋梁などもメタルや鉄筋コンクリートに架替られ、しだいに林鉄の姿をととのえていった。